

「やもめの献金」

(マルコ12:38-44)

挽地茂男

2018.10.14 千歳丘教会神学校日礼拝

※マルコの本文は最終頁にあります

今日は神学校日礼拝です。神学校と神学生のたために祈っていきたいと思います。わたしが神学校の教員をしていました時代には、神学生に、神学生の時代いろんな教会を見ておくようという指導をしていました。牧師や司祭になって牧会に追われるようになると、他の教会や教派やまして他の宗教への関心も、その礼拝に出かける余裕もなくなっていくので、是非今のうちに自分たちと違う教会や教派、宗教から学ぶ機会をつくるように勧めておりました。学校からはそのために必要となる交通費と昼食代を出していただいて、そのような機会を設けておりました。もちろん学生には報告の義務があります。学生たちはこのときぞとばかりに、カトリックや福音派に



いたる様々な教会や、さらにはイスラームの礼拝やシナゴグのユダヤ教の礼拝に至るまで、いろいろな礼拝に参加しておりました。その頃の学生たちの報告の中で興味深く感じたのは、東方正教会（ギリシア正教）と救世軍についての報告でした。東方正教会の教会はお茶の水にありますが、ご存じだと思いますが、ニコライ堂がそうです。ここにはわたしも学生と一緒に参加したのですが、礼拝時間が長い、しかも3時間立ちっぱなしで、途中で近くの椅子に座りしたら、「どうぞお立ち下さい」と係の方に促されて、なかなか大変でした。救世軍には一緒に行けなかったのですが、面白い報告を聞くことができました。救世軍は皆さんもご存じだと思いますが——どうも救世軍の社会鍋のイメージと結びついているせい——何かしら理由のない親近感のようなものがあります。（社会鍋の募金活動でご苦労なさっている方には失礼ですが）時々調子の外れるトランペットの伴奏で讃美歌〔正確には「救世軍歌」〕を歌いながら、新宿や渋谷の繁華街で、鍋をつるして募金される姿に、クリ

スマスや年末のシーズンなどには、世知辛い世の中に小さな人のぬくもりを感じてしまうのかも知れません。

でも異様な感じがしますよね。初めて見ると。あの軍服姿は。キリスト教なのに、とってしまいますよね。救世軍はその組織運営のために、軍隊組織・制服（軍服）・軍隊用語を採用していて、教団で教区と言うところを「連隊」と呼び、教区議長を「連隊長」と呼びます。地域教会に当たるものを「小隊」と呼び、当然、牧師は「小隊長」と呼ばれます。ちなみに神学校は「士官学校」と呼ばれ、神学生は士官候補生になるわけです。〔ですからわたしたちの教会は救世軍式に言いますと、東京連隊、西南中隊所属、千歳丘小隊となります。〕この軍隊式のトップ・ダウンの組織形態は、アメリカの経済専門誌『フォーブス』で「全米で最も効率の高い組織」として評価されているそうです。聖書神学者渡辺善太、ヤマト運輸元社長小倉昌男などがこの救世



渡辺善太

軍の出身者であります。

日本では1895年から山室軍平らにより布教活動が行われ、貧民救済運動、廃娼運動〔廃は「廃止」、娼は「娼婦」の娼〕を皮切りに、現在では医療施設や社会福祉施設の運営、他国の救世軍と連携しての内外の災害発生時の支援活動なども行っています。日



本の社会福祉や社会事業は、その多くがキリスト教によって先鞭をつけられておりますが、なかでも貧民救済運動といえば、「救世軍」の山室軍平の働きが取り上げられることが多いと思います。山室軍平は日本人初の救世軍士官で初代の日本軍国司令官であります。岡山県出身で、石井十次、アリス・ペティ・アダムス、留岡幸助とともに「岡山四聖人」と呼ばれる人です。明治時代、「救世軍」日本支部司令官として伝道に従事し、先程申しました貧民救済、廃娼運動、婦人ホームの建設、免囚保護〔出獄者の保護〕事業、(労

作館の創設)などの社会事業の面で多くの業績を残した人でありま
す。

旧約聖書の預言者も新約聖書の主イエスも、それぞれの仕方で「貧しさ」に立ち向かった存在です。本日の聖書箇所である福音書(マルコ12:38-44)の後半にも(12:41-44)、有名な貧しい「やもめの献金」の記事が出てまいります。そしてその記事の前には主イエスの、律法学者に関する非難の言葉が記されています。本日の聖書箇所はこの二つの記事を一連の記事として読むために選択しました。どちらの記事を理解するにもお互いの記事を必要としております。

前半の38-40節において、主イエスは、律法学者について警告を発しています。「**律法学者に気をつけなさい**」と始まります。



12:38 イエスは教えの中でこう言われた。
「律法学者に気をつけなさい。

彼らは、長い衣をまとして歩き回ることや、広場で挨拶されること、12:39 会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、12:40

また、やもめの家を食べ物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

このような非難によく似た内容の記事は、まずは、本日のマルコの並行記事で

ある①ルカ福音書20章45-47節にでてまいります。さらに②ルカ福音書11章37-52節及びマタイ福音書23章1-36節。ちなみにルカ11章43節ではこう記されています。

ルカ11:43 あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好むからだ。

マタイ23章5-7節では律法学者と同時にファリサイ派の人々に向けて、

23:5 「律法学者達やファリサイ派の人々」のすることは、すべて人に見せるためである。聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の

房を長くしたりする。23:6 宴会では上座、会堂では上席に座るこ



律法(トーラー)



とを好み、23:7 また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む。

それぞれが内容の非常によく似た批判を繰り返しておりますが、律法学者に対する非難のポイントを本日のマルコの箇所によって整理しておきましょう。それらのポイントを律法学者の「好きなもの」ないし「大好きなもの」として取り上げます。

つまり、一つ目に彼らは、(1) 長い衣が大好き (38節)。「長い衣」と訳されております「ストレー」(στολή) はヘブライ語では



「〔ヘ〕タリート」と呼ばれておりまして、ラビが着る、学者の身分を表す衣であります。彼らはその「長い衣」

を身に着けて、人々の視線の中を敬意を意識しながら歩きまわるのが好きなのです。

2つ目に彼らが好きなものは、(2) 広場で挨拶されるのが大好き (38節)。「長い衣」をまとって歩きまわり、人々から挨拶されることを好みます。「広場」とは、人々の日常的な生活の場であります

から、律法を学ぶ会堂だけではなく、あらゆる機会に挨拶されることを好むのです。マタイはこう記しています。23:7 「彼らは」広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む。

そして第3に彼らは、(3) 上席・上座が大好き (39節)。「上席」と訳されております「プロートカセドリア (πρωτοκαθεδρία)」という言葉は「プロートス」(第一のという意味の言葉) と「カセドラ」(座席を意味する言葉)



の結合して作られた言葉で、シナゴーク(会堂)の中の前方の聖書が収められている聖櫃の近くの前方の長いすのことで〔1等席〕、律法学者である彼らは、会衆に向かい合って座ることになります。

座席というものは、社会生活におきましても、客人を迎えたときに、敬意を表すために相応しい席を巡って少々厄介な場面に出会うこともございます。宗教の世界でも座席というのはなかなか厄介な場合もあります。皆さんは、「フリーメソジスト教会」という教団

をご存じでしょうか。



B.T. Roberts

自由メソジスト教会は、B.T. ロバーツという牧師が当時（1860年）の北米メソジスト監督教会に対して批判活動を展開したことから、除名、独立という過程を経て成立します。

その批判の中に「教会の有料座席制度」への批判が含まれております。それは高額献金者に対して、教会が特別の座席を割り当て、やがて有力者が教会の一部の座席を専有するという悪弊として固定化してまいります。ここで言うフリー・メソジストの「フリー」には、あらゆる差別や宗教的な拘束力から解放する福音の自由を意味すると同時に、「無料」

の意味もこめられているのです。

じつはこのような座席の問題はすでに初期のキリス



フリメソ大阪日本橋教会



ト教においても、問題として取り上げられております。ヤコブ書にはこう書かれています。2章2－5節。

ヤコブ2:2 あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も入って来とします。2:3 その立派な身なりの人に特別に目を留めて、「あなたは、こちらの席にお掛けください」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこに立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい」と言うなら、2:4 あなたがたは、自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下したことになるのではありませんか。2:5 わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。

そして第4番目に、律法学者は、(4) やもめの供応(もてなし)を受けるのが好き(40節)。「やもめの家を食いつぶし」と書かれているのは、やもめに対する犯罪的な搾取や、道義上問題になるような金

品の詐取を意味しているのではなく、やもめのための後見人(?)として、敬虔を装ってやもめに近づき、供应を受け、結果的にやもめの生活苦を増大させているということだと考えられます。人生の支えや寄る辺のない人々の悲しみや苦しみに取り入ることによって、苦しみを増幅させる無配慮や無神経や貪欲がそこにはあります。

そして第5番目に、彼らは、(5) お祈りを見られているのが好き(40節)。彼らは「見せかけの長い祈りをする」とイエス・キリストによって批判されております。

これらの律法学者に対する批判には、伝統社会における通常貴族階級の特権的行動にあたるようなものが列挙されておりますが、その問題点とは何でありましょうか。それは、第1に、宗教的外見の重視であります。それは、見せかけの宗教行為、パフォーマンスとしての宗教であります。さら



にその問題点は、第2に、その「権威志向」であります。それは、自己犠牲的に仕える者としての主イエスの権威とは対照的です。すでに学んだマルコ福音書10章42-45節にはこう記されております。

10:42 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。

「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振



るっている。10:43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、10:44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。10:45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

そしてさらにその問題点は、第3に、信仰的に見える宗教行為の内に隠された偽善や貪欲でありま



す。それは信仰を利用する態度であります。ですから

彼らの宗教には、第4に、**神の真理に対する関心が欠落する**のであります。

さて「やもめの家を食べ物にする」という律法学者の貪欲への批判が橋渡しとなって、次の「やもめの献金のエピソード」(41-44節)につながります。〔共通の言葉やテーマをバトン・リレーのようにしてエピソードをつなぐ技法はマルコ福音書に特徴的な技法です。9:30-50参照。〕

こうして「律法学者たち」の信仰の態度と、貧しいやもめの献金に表されている信仰の態度が対照的に描かれることになります。

41 - 44 節。



12:41 イエスは賽銭箱の向かいに座って、

群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。12:42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアド

ランスを入れた。12:43 イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。

「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。12:44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

このエピソードは11章から始まるエルサレム神殿境内での「論争物語」(第二論争物語集)を締めくくる物語であります。

すでに見ましたように、11 - 12章はエルサレム神殿を舞台にした物語が展開します。11章の「エルサレム入城」(11:1-11)、暗に神殿を意味する「実のないいちじくの木のエピソード」(11:12-14/11:20-26)、そのエピソードにサンドイッチにされた「宮清め」の物語(11:15-19)、そして11章



27節から12章37節までは、律法学者、祭司長、長老たち、ファリサイ派の人々、サドカイ派の人々、ヘロデ派の人々を相手にした神殿境内での一連の論争集になっています。そして〔それに続く12:38-40で次の「やもめの献金」との対比を目的として律法学者たちの行状を総括し〕論争集の締めくくりとしてこの「やもめの献金の物語」(12:41-44)が置かれています。この物語がこの文脈において持っている効果は歴然としています。すなわちこの物語は、神殿(神の御前)にいる者の最も相応しいあり方を象徴しているのです。つまりこの物語は、(1) 信仰は論争する力に現れるのではなく、神への献身に現れる、ことを教えるのです。またこの物語は、(2) 神の御前における**人間の評価の基準**を印象的に描き出しています。律法学者の律法に関する知識を人々は評価し、専門家としての彼らに敬意を払ったことでしょう。彼らは、この



レプトンコイン

やもめの女には、到底およびもつかない高度な議論に参画すること

が可能だったでしょう。神学を学ぶことは尊いことです。しかし神学を学ぶ者が、神への献身を忘れたとき、レプトン銅貨2枚の値打ちもないものになるのです。

やもめが献げた献金は**レプトン銅貨2枚**(すなわち**1クアドランス**)でした。1**レプトン**は128分の1デナリオン(8分の1アス[アサリオン])にあたります。当時の日当の相場が1デナリオンでしたからざっと1万円と換算すると、レプトン銅貨2枚は、128分の1デナリオンかける2で、わずか160円足らずの金額であります。



共和政ローマのデナリオン銀貨



皇帝アウグストゥス帝のアス銅貨

「**大勢の金持ちがたくさん〔の献金を〕入れて**」($\text{πολλοὶ πλούσιοι ἔβαλλον πολλά}$) いたとされる、見るからに仰々しい献金の様子とは対照的に、つつましかに自分の生活費の全部を献げるやもめの姿をイエス・キリストは見逃さなかった、とこの物語は語るのです。

神は取るに足らないものに目を注いで、それを大切なものとして

受容されるのです。それはまるで、子どものプレゼントを、そのプレゼントの資金が親からのお小遣いから出たものと知っていても——そんなことはどうでもよいか、まるでそんなことを忘れてしまったかのように——喜ぶ親に似ています。神はわたしたちの心を受け取られるのです。



デューラー「執筆中のパウロ」

取るに足らないものに目を注いで、それを大切なものとして受容する姿勢は、パウロによって教会論にまで発展させられています。パウロはコリントの信徒への手紙—12章12—26節で、教会を体にたとえながら、**劣っている部分がかえって大切にされる、**と語ります。12:20 **だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。**12:21 **目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。**12:22 **それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。**12:23 **わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われ**

る部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。12:24 **見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。**神は、**見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。**これはパウロの「教会の美学」であります。教会がどれほど豊かに富み、荘厳な伽藍や器物や調度品や、はたまた優れたキリスト教芸術に飾られ、牧者(司祭者)たちが美しい僧衣(聖職者の衣)で着飾っていたとしても、やもめの160円の献金に目の届かない教会は、教会として**美しくない**のです。またパウロに言わせれば、「**弱く見える部分**」「**恰好が悪いと思われる部分**」「**見苦しい部分**」を大切にしない教会は、**美しくない**のです。



この「やもめの献金」の物語は、

①「**大勢の金持**」(41節)と「**貧しいやもめ**」(42節)を対照的に描き出すと同時に、②この「**貧しいやもめ**」と「**律法学者**」(38-40節)の姿を対照的に描き出しているのです。そこには、神の御前における**人間の評価の基準**が印象的

に描き出されています。長い衣を
まとして、人々の挨拶を受け、会
堂の上席や宴会の上座に座り、や
もめの家を食い物にし、見せかけ
の長い祈りをする(38-40節) 姿
は、「貧しいやもめ」の姿とは対
照的です。

聖書には人間の衣服に関する意
味深い記述がいくつか出てきます。
人類が最初に身に着けた衣服、
それは創世記のいわゆる「墮罪物
語」に記された、アダムとエバの
裸を覆ういちじくの葉をつづり合
わせた腰の覆い
であります。

創世記 3 章 7 節。

創3:7 二人の目
は開け、自分た
ちが裸であるこ
とを知り、二人
はいちじくの葉をつづり合わせ、
腰を覆うものとした。



次に出てくる衣服は、罪を犯して
エデンの園を追放される、裸同然
のアダムとエバを覆う、神が与え
た皮の衣であります。

創世記 3 章 21 節。

創3:21 主なる神は、アダムと女
に皮の衣を作って着せられた。

これは神の恵みの服であります。

罪ある裸を覆う神の衣でありま
す。この恵みの衣の発想を展開さ
せて、新約聖書はこういうのです。
コロサイ書 3 章 9 - 10 節。

コロ3:9b ……あなたがたは、古
い人をその行ないといっしょに脱
ぎ捨てて、3:10 新しい人を着た
のです。新しい人は、造り主のか
たちに似せられてますます新しく
され、真の知識に至るのです。(新
改訳)

さらに進んでパウロはこうも言う
のです。ガラテヤ書 3 章 27 節。
ガラ3:27 洗礼を受けてキリスト
に結ばれたあなたがたは皆、キリ
ストを着ているからです。(+ロ
マ13:14)

キリスト者が最初に着るべき服
は私たちの罪を覆う恵みの服であ
ります。それは神の恵みと愛と赦
しの現れとしてのキリストであり
ます。聖職者や牧師・教師(司祭
者)がこの恵みの服を着ている限
り、その着衣の、軍服や式服の凜
々しさや美しさは、神の恵みの美
しさ、その豊かさを表現するもの
となるでしょう。

人は真に恵みを受ければ受ける
ほど謙虚にされていくものであり
ます。長谷川保という浜松を拠点

とする〈聖隷福祉事業団〉の創設者は、そのようなキリスト者のあり方を「下に昇る」と表現したことは、何度かご紹介しました。それは仕える者の姿をとってどんどん下へと下っていくキリストの姿に反比例して、神の評価が高まっていく次第を伝えています。フィリピ書の思想です。キリストは「**神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿を**」とった、と語り、さらに「**キリストは人として**



の性質を持って現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、十字架の死にまでも従われた」と

キリストの生涯をまとめます。そしてそこから反転して「**それゆえ、神は、キリストを高くあげて、すべての名になさる名をお与えになりました**」（フィリピの信徒への手紙2:3-9）と宣言するのです。

最初に紹介いたしました救世軍には、創設者であるウィリアム・

ブースの“WWW”（While Women Weep — 女性が泣いている限り）

として語り継がれている言葉があります。このような言葉です。



ウィリアム・ブース

「今日そうであるように、女性が泣いている限り、わたしは戦う。幼い子供が飢えている限り、わたしは戦う。男たちが刑務所に出入りする限り、わたしは戦う。酔っぱらいが残っている限り、街頭に哀れな女性がいる限り、神の光を受けていない一人の魂でもある限り、わたしは戦う。終わりまで戦う。」（救世軍公式サイトより）

この戦いの精神は、主イエスに論争を挑んだ律法学者の自己保持の精神とは違います。神と他者のために自分自身を献げる献身の精神なのです。それはレプトン銅貨2枚を献げたやもめの精神により近いのです。やもめが献げた「生活費」と訳されている言葉は、元来「命」（βίος）という言葉です。わたしたちの聖書は言います。

Ⅰヨハ3:16 イエスは、わたしたちのために、命を捨ててください

ました。そのことによって、わた
したちは愛を知りました。だから、
わたしたちも兄弟のために命を捨
てるべきです。
祈りましょう。

2018.10.14 千歳丘教会神学校日礼拝



12:38 イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとして歩き回ることや、広場で挨拶されること、

12:39 会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、

12:40 また、やもめの家を食いにし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

12:41 イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。

12:42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。

12:43 イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。

12:44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

12:37b … καὶ (ὁ) πολὺς ὄχλος ἤκουεν αὐτοῦ ἡδέως.

12:38 Καὶ ἐν τῇ διδαχῇ αὐτοῦ ἔλεγεν, Βλέπετε ἀπὸ τῶν γραμματέων τῶν θελόντων ἐν στολαῖς περιπατεῖν καὶ ἀσπασμοὺς ἐν ταῖς ἀγοραῖς

12:39 καὶ πρωτοκαθεδρίας ἐν ταῖς συναγωγαῖς καὶ πρωτοκλισίας ἐν τοῖς δείπνοις,

12:40 οἱ κατεσθίοντες τὰς οἰκίας τῶν χηρῶν καὶ προφάσει μακρὰ προσευχόμενοι· οὗτοι λήμψονται περισσότερον κρίμα.

12:41 Καὶ καθίσας κατέναντι τοῦ γαζοφυλακίου ἐθεώρει πῶς ὁ ὄχλος βάλλει χαλκὸν εἰς τὸ γαζοφυλάκιον. καὶ πολλοὶ πλούσιοι ἔβαλλον πολλά·

12:42 καὶ ἐλθοῦσα μία χήρα πτωχὴ ἔβαλεν λεπτὰ δύο, ὃ ἐστὶν κοδράντης.

12:43 καὶ προσκαλεσάμενος τοὺς μαθητὰς αὐτοῦ εἰαυτοῖς, Ἄμην λέγω ὑμῖν ὅτι ἡ χήρα αὕτη ἡ πτωχὴ πλείον πάντων ἔβαλεν τῶν βαλλόντων εἰς τὸ γαζοφυλάκιον·

12:44 πάντες γὰρ ἐκ τοῦ περισσεύοντος αὐτοῖς ἔβαλον, αὕτη δὲ ἐκ τῆς ὑστερήσεως αὐτῆς πάντα ὅσα εἰέβαλεν ὅλον τὸν βίον αὐτῆς.